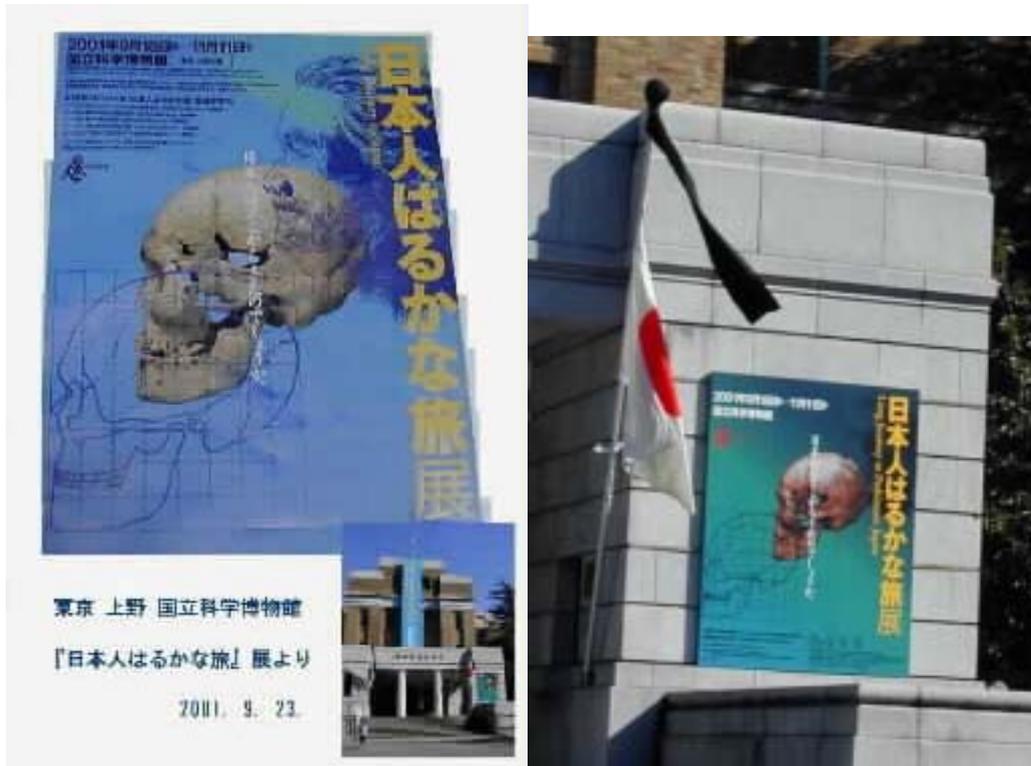


7.

『日本人 はるかな旅 日本の源流』展を見て

ルーツの旅に現代を重ねて

japan01.htm by M.Nakanishi 2001.10.10.



「日本人 はるかな旅 日本の源流」展

国立科学博物館の正面にはニューヨーク貿易センタービル爆破テロの犠牲者への弔旗がかかげられていた。

本当にむなしい出来事 人類の長い歴史の智恵で克服できないものであろうか

NHK で『日本人 はるかな旅』シリーズが始まっている。また、これにあわせ東京・上野の 国立科学博物館で『日本人 はるかな旅』展も始まった。

数百万年前 人類の祖先が誕生し、立ち上がって歩き出したその二足歩行の足跡が 350 万年前のアフリカの大地に記されている。その足跡化石が公開展示されていました。『ルーツのルーツ』に思いひとしお。

アフリカで誕生した人類がその後地球寒冷化の中、凍りつく大地を獲物・温暖の地を求め 遠くアジア大陸を渡り シベリヤを経由して 3 万年前 樺太・北海道・本州へと日本にやって来た原日本人。また、凍りつくアジア大陸の中、海面の低下により地続きの温暖の地となったマレーシア・インドネシア地域(スンターランド)から、2 万年前黒潮に乗って沖縄・鹿児島を経て日本にやって来た縄文人。落ち着いた気候に変化したこの長い縄文時代から弥生時代じょうにかけ、海や海峡をわたり朝鮮や大陸から日本にやって来た渡来の民。 これら日本列島へやって来た人たちが混じり合って出来上がった日本人。

『日本人のルーツ・日本誕生』について、多くのロマンを込めて色々語られてきたが、そのベールが今ひとつ一つはがされつつある。

最近の遺伝子解析などの成果は数万年前の日本人のルーツの物語のみならず、『人類誕生の 35 万年前の姿』までもを生き生きと浮かび上がらせている。ビックリするような話であるが、いずれも根拠と立証がなされつつあるのが素晴らしい。

この展示をみていると『日本人は島の単一民族』などという考えは全く根拠を失ない、まさに『人間みな兄弟・地球人』の感がふつと浮かんで来る。



アフリカ タンザニア
360 万年前の人類の先祖が印した
二足歩行足跡の化石
おとなと子供の二人連れか
「日本人はるかな旅」展で



人類進化の歴史
猿人・類人・原人から新人(現代人)へ
茨城県立自然博物館 展示より

また、視点を厳しい環境を生き抜いてきた人類 35 万年延々と続く『知恵と技』に変えると「本当にまあ、よくこの激変する環境をのりこえてきたものだ」と感じる。今を激変の時代と捕らえているが、そんなものちっぽけに見えてくる。

縄文人は決して野山を駆け巡る野蛮人ではない。世界 4 大文明にも匹敵する『木の文化』を咲かしている。巨大な木を切り倒しそれを加工する技術は延々と今に続く日本の木の文化の支えである。

北の縄文の民三内丸山遺跡では巨大な木を加工する技を持ち、大きな集落の定住生活を栗などの木の実など植物栽培で成し遂げている。おそらく延々と栽培植物を捜し求め、やっと行き着いた結果であろう。

DNA 分析が栽培をうらづけている。

鹿児島の上野原縄文遺跡で発見された大量の平底土器は三内丸山縄文人の祖先たちが土器と火を使ってどんぐりなどの木の实を貯蔵・灰汁抜きをする事でその主食を狩猟肉食から植物へ拡げていった先駆の知恵であり、世界で一番早い平底土器使用と言われている。

この狭い日本列島での人口増ときびしい環境変化を知恵と技で生抜き、次々と素晴らしい技を生み出してきた祖先たちの姿が人類-日本人のルーツの中に位置付けられている。

1 天才の出現というより、その時々の人達が延々と技術を作り継承・改良してきた「人の技と智恵」。

「必要は発明の母」とよく言うが、現代に置き換えても本当に「素晴らしいアイデア」である。

でも これらの技は開発・改良に数百年・数千年という長い時間をかけた伝承・改良によって成し遂げられた技術でもある。原始航海術など現代においても「解明できていない謎」も多いがこれらも同じだろう。

現代のあくせくするスピードと付け焼刃的な対応「一夜にして変わる価値観」の連続多様化の時代 飽食の時代 機械文明の時代 といわれるが、何か満たされないこの現代を乗り越えるヒントがあるように思う。

いつも 技術革新に遅れまいとあくせくし、脅迫観念にとらわれている現代。何か毎日がちっぽけで、「生き方かえなあかんのかあ・・・」との不安感にさいなまれる現代。
天才でもない人それぞれが今もコツコツと歴史を刻みつづけている。この刻みが何千年・何百万年か先にまで受け継がれ、平成の技として刻み付けられていると思うと元気が出てきます。
こんな事が DNA 分析なんかで判るようになってきたこと全く知りませんでした、ビックリです。
現在の日本人は「縄文人/弥生人いずれに近いか?」を顔分析から分析した結果も DNA 分析もほぼ「3 対 7」の比率だそうだ。 おそらく 耳の中の湿り具合なんかの分析もそれにちかいのではないだろうか・・・『蒙古斑はどうなんだろうか・・・』なんて想像が随分現実味を帯びて考えられる。
「沖縄県人だ」「東北人」「はたまた京都の公家の出。 気質が違う」などと言ってみてもすべてこのルーツ日本人のかごの中で揺れているのにすぎないのか・・・・。そういえば、生き別れた親子の確認の手段に DNA 鑑定が使われるのも納得。
今まさに起こっている戦争も貧困と飢えに苦しむ南北問題も 先を急ぐのではなく ルーツをベースに基へ基へとたどってゆけば、和解の道 協働の道がひらけるのではないか・・・
共同の土俵へのアプローチこそ 350 万年前から延々と続く人類の知恵と技ではないか・・・・
これを逸脱すると破滅への道 そんな風に思う。

技術屋では行き詰まった時は『原点に帰れ』とよく言うが、今がこれだろう。
また、この流れを解き明かしてきた分析・計測法の進歩が時間の壁を次々と取り払っている。
木に刻まれた年輪による年代計測法 放射性炭素 C14 による年代計測法など『時間を解き明かす計測法』と『ルーツ・伝承を解き明かす方法』としての DNA 分析等。
これらの急速な進歩によって、今を想像だにしなかったことが、次々と解き明かされている。
発掘で今の世に出てきた冷たい物としての道具や遺構が生き生きと人の姿 生活 生き様など時代時代の姿をふつふつと浮かび上がらせている。
立証の手段を持つ事が物事を次々と深くつき進め、あいまいさを取り去って物事を前向きに前進させてゆく。
人類がたどってきた足跡人類が生き延びてゆくためのアフリカからの壮大な旅 厳しい自然・環境変化との戦いの流れの中で会得した知恵・技の数々。何気なく暮らしてきた我々の中に引き継がれてきたそれらの大きさにビックリする。『本当にお互いに相容れないのでは・・・』と感じてきた肌の色さえも人類が環境対応の中で取得した知恵・技である。
『森の民 縄文人』といわれるが 森に手を入れ住める環境に変えつつ森を住処にしてきたわけで、うっそうとした原始林の中に住んでいたわけでない。決して原始の森は人間がすめたものでない。
縄文の『ストーンサークル』が作られた静寂の森の中に感じだ息遣いがこの人類がたどって来た足跡と知恵であったような気がする。

日本人はるかな旅 日本人の源流展をみて 歴史の流れと今を行き来しつつ

2001. 10. 10. 夜 暗闇を突っ走る東北新幹線の中で